

強者の戦略

こんにちは、国語科の松崎です。『とはすがたり』いかがでしたか。今回は解説編です。まず、問題の確認から。

次は『とはすがたり』の一節です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

尾張の国、熱田の社に参りぬ。御垣を拜むより、故大納言の^①知る国にて、この社は我が祈りのためとて、八月の御祭りには、かならず神馬をたてまつる使ひを立てられしに、最後の病ひの折、神馬を参らせられしに、生絹の衣をひとつ添へて参らせしに、萱津の宿といふ所にて、にはかにこの馬死ににけり。驚きて、在庁が中より馬は尋ねて、参らせたりけると聞きしも、神は受けぬ祈りなりけりとおぼえしことまで、数々思ひ出でられて、あはれさも悲しさもやる方なき心地して、この御社に今宵はとどまりぬ。

都を出でしことは、如月の二十日余りなりしかども、さすが慣らはぬ道なれば、心はすすめど、^②はかも行かで、弥生の初めになりぬ。夕月夜はなやかにさし出でて、都の空もひとつながめに思ひ出でられて、今さらなる御面影もたち添ふ心地するに、御垣の内の桜は、今日盛りと見せ顔なるも、^④たがため匂ふこずるなるらむとおぼえて、

(a) 春の色もやよひの空に鳴海濁いまいくほどか花も杉村

社の前なる杉の木に、札にて打たせはべりき。思ふ心ありしかば、これに七日籠りて、またたち出ではべりしかば、鳴海の潮干潟をはる行きつつぞ、社をかへり見れば、霞の間よりほの見えたる朱の玉垣神さびて、昔を思ふ涙は忍びがたくて、

(b) 神はなほあはれをかけよ御注連縄ひき違へたる憂き身なりとも

注 熱田の社——熱田神宮。現在の、名古屋市熱田区。

故大納言——作者二条の父雅忠。

萱津の宿——東海道の宿駅。現在の、愛知県海部郡甚目寺町。

在庁——在庁の官人。国府において実務をおこなう役人。

神は受けぬ祈り——恋せじと御手洗川にせしみそぎ神は受けずもなりにけるかな(『伊勢物語』)

強者の戦略

問一 傍線部①の「知る国」とはどういう意味か、解釈しなさい。

問二 傍線部②の「神は受けぬ祈り」とはどういうことか、説明しなさい。

問三 傍線部③の「はかも行かで」の意味を書きなさい。

問四 傍線部④の「たがため匂ふ」を解釈しなさい。

問五 和歌(a)に用いられた掛詞を指摘し、具体的に説明しなさい。

問六 和歌(b)をわかりやすく現代語に訳しなさい。

【解説】

出典の確認からはじめましょう。直近の京大の入試で出題された出典ですので、気づいた方もいらつしやるかと思いますが。

『とはずがたり』は鎌倉時代の中後期に、後深草院二条が綴ったとされる日記・紀行文です。後深草院二条というのは、男性か女性か分かりづらい名前ですが、後深草院に仕え、寵も受けた女房、つまり女性のことです。

前半は宮中での波瀾万丈な生活、後半は出家し、尼となって行った旅の記録だと思っておいてください。大学入試ではそこまで頻繁に見かけるものではありませんが、マイナーではない作品ですので注意しておきましょう。今回の出典部分は、彼女が旅をしている様子が描かれていますから、作品の後半部分だと分かりますね。

「尾張の国、熱田あつたの社やしろに参りぬ。御垣みかきを拝むより、」

今の名古屋市熱田区の熱田神宮に作者は参詣しました。文法で注意すべきは二文目の格助詞「より」ですね。なかなか見られない用法ですが、「くするとすぐに」という即時の用法が今回は使用されています。「御垣根を拝むとすぐに」ですね。では、拝むとすぐに彼女は何かをしたのでしょうか？続きの文は、彼女の亡き父の思い出が綴られていますから、父にゆかりの深い神社の垣根を見て、すぐさま昔のことを思い出した、と考えておいてください。

「故大納言の①知る国にて、この社は我が祈りのためとて、八月の御祭りには、かならず神馬じんめをたてまつる使ひを立てられしに、」

傍線部①の語彙問題です。「尾張の国は故大納言が知っている国で」ではおかしいな、と気づいたら、後もう少しです。「知る」は定番の古文単語で、「領る」という表記か、ひらがなで見かけることが多かったかと思いますが、このように「知る」の字で出題さ

強者の戦略

れることもありますので注意しましょう。「領る」という字から分かるとおり、「領有する」だとか、「知る」という字のニュアンスを出すならば、「知行する」あたりを採用し、傍線部①は「知行する国」に落ち着くでしょう。

作者の父である故大納言は、自分が知行していた尾張の国の中にある熱田神社の八月のお祭りの際には、自身の祈りのために神馬を奉納することを決めていたのですね。

「最後の病ひの折、神馬を参らせられしに、生絹すずしの衣をひとつ添へて参らせしに、萱津かやつの宿しゆくといふ所にて、にはかにこの馬死しににけり。」

最後の病とは、直近でかかった病か、死ぬ前にかかった病かのどちらかだと考えられますね。今は作者の亡き父についての話ですから、死者である父はこれ以上病にかかることが出来ません。ですので、冒頭は「父の最後の病の時に」と解釈しましょう。

この時にも、例に漏れず神馬を奉納しました。（古文単語「参らす」には「献上する」という意味がありましたね。）その際に、生絹の衣も馬と一緒に奉納しようとしたのですが、萱津の宿という場所で突然、奉納するはずの神馬が死んでしまっています。

「驚きて、在庁あいちやうが中より馬は尋ねて、参らせたりけると聞きしも、^②神は受けぬ祈りなりけりとおぼえしことまで、数々思ひ出いでられて、あはれさも悲しさもやる方なき心地して、この御社に今宵はとどまりぬ。」

奉納しようとした馬が死んでしまったのですから、みんな驚きますし、大慌てで代わりの馬を捜さねばなりません。今回は注釈より、在庁の役人の所有している馬の中から代わりの馬を捜して奉納したといっていますね。そして、そういった経緯があったにもかかわらず、傍線部②「神は受けぬ祈り」と書かれています。注釈より、伊勢物語からの引き歌だと言ったことが分かります。引き歌はが有る際は、もとの歌の解釈もしつかりと行いましょう。今回のもとの歌は、「恋をすまいと、御手洗川でしたみそぎ（神に仕える人が身を清めること）ですが、神様はお受け取りにならなくなつたのですね」と解釈できます。これから神に仕えるのだから、恋をすまいとみそぎをしたのに、神様はその思いを受けとって下さらなかつた、つまり、この歌の詠み主は、また恋をしてしまったのですね。今回の文章で考えると、故大納言は何の祈りを神に対して行っていたかという点、自分自身の病が良くなるようにと祈り、神馬を奉納していたことが分かります。途中、神馬が死んでしまうというトラブルに見舞われ、代わりの馬を見つけてきますが、それでも神様は故大納言の祈りを受け取らなかつた、つまり、故大納言の病は良くなることがなく、彼は死んでしまったということですね。

作者は、父の祈りが神に受け入れられなかつたことなどを思い出しながら、しみじみとした心で、熱田の社で夜を明かします。

「都を出でしことは、如月きげつきの二十日余りなりしかども、さすが慣らはぬ道なれば、心は

強者の戦略

すすめど、^③はかも行かて、^{やよい}弥生の初めになりぬ。」

『とはずがたり』の後半は、彼女の旅の記録ですから、「都を出(て旅に出)たのは、二月の二十日と少しの日」というように、旅始めについての記録が出てきました。ずっと宮中で生活していた女性が、急に旅に出ることになりましたから、慣れないことだらけです。先へ進もうとする心とは裏腹に、傍線部^③のように「はかも行かて」という状態だったといえます。「はか」は、現代の「はかどる」という言葉を思い浮かべてもらえれば解答しやすかったのではないでしょうか。「慣れない旅で道もはかどらないで」くらいの意味で解釈すれば良いでしょう。彼女は二月の終わり頃に出立し、三月の初め頃、愛知県に到達したと、今回の旅を振り返ります。

「夕月夜はなやかにさし出でて、都の空もひとつながめに思ひ出でられて、今さらなる御面影もたち添ふ心地するに、御垣の内の桜は、今日盛りと見せ顔なるも、^④たがため^⑤句ふこずゑなるらむとおぼえて、」

熱田の社に宿泊した夜の様子が描かれます。月が美しく立ち上り、都の空も同じように美しい眺めであったことが思い出されます(旅に出ている人物が、空の月を眺めて都を思い出すというのは、紀行文のお決まり表現です。当時の旅は、今ほどレジャー色が強くなく、危険を伴うものであったため、旅をする人はどこかしら物思いに沈みやすい状態にあるんです)。そして、今改めてある人の面影が自分の傍に浮かんできくる気持ちが出ています。設問に絡む箇所ではありませんが、「面影」に尊敬の接頭語「御」がついていること、都を思い出しているときに想起された人物であることを考え合わせると、この面影は作者のかつての主人、後深草院であると考えるのが妥当でしょう。

都を思わせるような月に、都での思い出深い人物を思い浮かべながら、一人で遠く熱田の社に宿泊している作者。垣根の内の桜が目に入ります。その桜は「今が盛りだ」と人々に見せつけるような様子であることを、「たがため句ふこずゑ」と作者は感じてしまします。「たがため」は、「誰のために」や「誰にとつて」という意味の語ですね。「句ふ」は、「句ひ」という名詞で覚えている人も多いでしょう。いわゆる香気、臭気他には、「(句うのような)美しさ」という意味がありました。今回は桜の枝を眺めながら、句いではなく満開の様子、見た目について描かれている場面になりますので、「誰のために美しく咲き輝く(枝)」と考えるのが良いでしょう。都に比べれば、格段に静かな熱田の社で、美しく咲き誇る桜に対して、誰のために咲いているのか、という感慨を述べたのですね。

(a) 春の色もやよひの空に鳴海瀉^{なるみ}いまいくほどか花も杉村^{がた}

掛詞を指摘する問題です。基本的には平仮名の部分から捜しますが、難易度の高い問題ではあらかじめ漢字表記されている事もあるので注意が必要です。「やよひ」「いまいくほど」が平仮名ですが、「やよひ」は「弥生」、「いまいくほど」は「今いく程」くら

強者の戦略

いしか、地の文の流れからも、和歌の内容からも漢字を当てはめることが出来ませんので、今回は漢字部分も検討していく必要があります。

こういった場合、すこしヒントとして和歌のつながりが悪くなっている部分に別の漢字を当てはめてみる、というのがコツとなります。まず、上の句。「春の色も弥生の空に鳴海渦」古文での春は一月〜三月ですが、その春の色も、春の終わりである弥生の空に：鳴海渦。格助詞「に」は場所や時、資格などを表しますが、弥生の空に鳴海渦（愛知にあった海浜）では、どうもつながりが良くありません。「（三ヶ月続く）春も、弥生のそらに成る」と考える方がしっくりきます。つまり、「鳴」には「成る」と「鳴海」が掛けられており、「弥生の空に成ったその鳴海渦は」と考えられます。

下の句は、「いまいくほどか花も杉村」。「花も杉村」が何のことか分かりませんね。三月と言うことは、春の終わり。花も散っていきます。先ほども、今を盛りに咲いている桜の描写がありましたが、満開の桜は、あとは散るだけです。そうすると、「花も杉村」は、「花も過ぎ」そして「（常緑の）杉が目立つ村となる」と考えることが出来ます。

「社の前なる杉の木に、札にて打たせはべりき。思ふ心ありしかば、これに七日籠りて、またたち出ではべりしかば、鳴海の潮干渦をはるる行きつつぞ、社をかへり見れば、霞の間よりほの見えたる朱の玉垣神さびて、昔を思ふ涙は忍びがたくて、

（b） 神はなほあはれをかけよ御注連縄ひき違へたる憂き身なりとも」

札にこの和歌を書いて、社の前の杉の木に打たせた、とあります。おそらく、奉納歌ということなのでしょう。思う所があつたので、作者はこの熱田に社に七日間籠もって、そうしてまた旅に出ます。鳴海の潮干渦をたどりながら、熱田の社を振り返ってみたところ、霞（春の風物詩ですね）の間から見える朱色の玉垣が神々しく見え、昔のことを思い出して流れる涙を我慢することが出来ず、歌を詠みました。

さて、和歌の解釈の前に、昔を思い出して涙を流したという表記について考えましょう。和歌（b）を現代語訳するにあたっては、その歌を詠んだときの作者の心情を無視できないからです。作者のいう「昔」とは何でしょうか？熱田の社があまりにも古くて神々しくて、その歴史に感動して涙を流したのでしょうか。それとも、父の事を思い出して涙を流したのでしょうか。はたまた、「御面影」と出ていたところから想像できるような、後深草院に仕えていた宮中の生活を思い出して涙を流したのでしょうか。どれだ

「神はなほあはれをかけよ」ここはそのまま、「熱田の社の神は、それでも情けをかけてください」でいいでしょう。「御注連縄ひき違へたる憂き身なりとも」ここが難しいところです。直訳は、「しめ縄を引き違えてしまった辛い身であっても」ですね。少しづつ考えていきましょう。まず、「憂き身」とは誰の身のことでしょうか？もちろん、和歌は詠み手の感情表出という面を持っていますから、「憂き身」とは「作者」のことですね。では、作者がしめ縄を引き違えてしまったとはどういうことでしょうか？とく

強者の戦略

に地の文にはしめ縄についての記述がありません。

和歌の中に、地の文とは関係のない事物が登場した場合、それは「掛詞」「思い出の連想」「比喩」といった表現に絡む可能性があるので、一つずつ検討していきましよう。まず、「御注連縄」「ひき違えたる」これに当てはめることが出来そうな他の漢字は地の文からは見当たりませんから、「掛詞」は不適です。次に、彼女にはしめ縄について思い出があるとも文章からは見受けられませんから、「思い出の連想」も不適です。では、「比喩」はどうでしょう？「しめ縄を引き違えたように」な辛い身と考え

ます。「しめ縄」は神聖な場所とそうでない場所の境目を示すものですね。聖なる場所と俗なる場所を分かち印だと思えば良いでしょう。そうすると、しめ縄を引き間違えると、聖なる場所と俗なる場所の境目が変わってしまします。そして作者は、聖なる場所と俗なる場所の境目を変化させてしまった憂き身、と表現されています。もうお気づきでしょうか？冒頭の出典知識の際に、『とはずがたり』の作者は、宮中で後深草院に仕えた後、出家して旅をしているのでした。俗の世界から聖の世界へ身を移したのが作者です。そこが分かってくると、和歌を詠む前に作者が「昔」を思つて涙を流した内容も分かってきます。出家して聖俗の変化したわが身を辛いと嘆いているのですから、かつて宮中で後深草院に仕えた昔を懐かしんで涙を流しているのですね。ですので、このわか全体としては、「熱田神宮の神様はそれでもやはり憐れみを掛けて私をお守りください。たとえお社の注連縄を引き違えたように運命を引き換え、以前と異なった尼姿になりづらい思いの絶えない私でありましょう」という解釈が成り立ちます。

以上、『とはずがたり』でした。最後の和歌解釈はかなり難しかったかのではないかと思います。いかがでしたか？最後に、解答と現代語訳です。

【解答】

問一 知行して治めている国

問二 奉納する予定の神馬が今年は急死したので、その代わりの馬を奉納したが、祈りはむなしく、神はそれを受納せずに父の死を招いたということ。

問三 慣れない旅で道もはかどらないで

問四 いったい誰のためにこんなに美しく咲き輝く

強者の戦略

問五 第三句「鳴」に「空になる」と「鳴海渦」が掛けてあり、また結句に「杉」に「花も過ぎ」と「杉村」が掛けてある。

問六 熱田神宮の神様はそれでもやはり憐れみを掛けて私をお守りください。たとえお社の注連縄を引き違えたように運命を引き違え、以前と異なった尼姿になりつらい思いの絶えない私でありましょうとも。

【通釈】

尾張の国の熱田神宮の参詣した。周囲の神垣を拝見するやいなやたちまち思い出されたのは、この尾張の国は亡き父大納言の領有し治めた国であつて、この神社には父自身の祈りのためということで、八月の祭礼には必ず神馬を奉納する使者をお立てになったものだが、父の最後の病氣の際に、神馬を奉納なさった折に、絹の衣装を一枚添えて献上したところ、尾張の萱津の宿というところで、急にこの馬が死んでしまった。驚いて国府の役人の中から代わりの馬を探して献じたと聞いたが、（父は祈りむなく死んでしまったので）神は受納なさらないお祈りだったのだなあと思われたことまで、あれこれと思い出されて、しみじみとした哀れさも悲しさも慰めようのない気持ちが出て、この神社に今夜は宿泊した。

都を出立したのは二月二十日過ぎであつたが、何といつてもやはり慣れない旅路であるから、心ははやるものの道のりははかどらないで、三月の初めになった。夕方の月が美しく昇ってきて、都の空でも同じような眺めであつたのが自然と思い出されて、今さらのように後深草院の御面影も目の前に立ち添う心地がするにつけ、境内の桜は今日が盛りと咲き誇った様子を見せるような風情であるのも、いったい誰のために咲き輝いている梢なのであろうかと思われて、

春景色も晩春三月の空になり、ここ鳴海渦のお社では、あと何日かで桜の花も盛りを過ぎ、あたりは杉の緑の季節になることだろう

と詠んで、神社の前にある杉の木に、札に書いて（奉納歌として）打ち付けさせました。思うところがあつたので、ここに七日間参籠して、また出発しましたが、鳴海の潮干潟をはるばる行きながら、神社を振り返って見ると、春霞の途切れる間から微かに見える朱色の玉垣が神々しく、宮中でお仕えしていた昔を懐かしく思う涙は抑えにくくて、

熱田神宮の神様はそれでもやはり憐れみを掛けて私をお守りください。たとえお社の注連縄を引き違えたように運命を引き違え、以前と異なった尼姿になりつらい思いの絶えない私でありましょうとも